



## 習近平の権威強化 ～『人民日報』に見る習近平の君臨～

地域研究部 中国研究室 岩本 広志

NIDS コメンタリー

第 188 号 2021 年 8 月 26 日

### はじめに

中国で習近平の権威強化が進められている。習近平指導部の発足以降、反腐敗運動により政敵の粛清が進められ、既に党規約及び憲法には指導指針として、毛沢東以来となる形で習近平の「思想」が書き入れられている。また、憲法改正により既に「終身」習近平体制が可能な形となっている。建国の父・毛沢東は、死ぬまで最高指導者であり続けたが、習近平は今やその毛沢東に迫る勢いなのである。このことは、中国共産党創立 100 周年に際する一連の行事等においても改めて確認された。

中国のメディアは為政者の立場から、常に党及び人民の「喉と舌」として機能することが求められており、その報道ぶりには党指導部の意向が色濃く反映されているものと思われる。本稿では、中国共産党の機関紙である『人民日報』における扱いを見ることで、如何に習近平の存在が強調されているのかを確認するとともに、歴代指導者の扱いと比較して、習近平の圧倒的な存在感について指摘する。

### 進められる習近平の権威強化

かつて、中国の共産党規約及び憲法に登場する歴代指導者の名前は、建国の指導者である毛沢東と、改革開放の総設計師とも称される鄧小平だけであったが、2017 年 10 月に開催された第 19 回党大会を受け、「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」として、習近平の名前が明記された。「思想」に名前を冠して掲げられるのは毛沢東以来であり、鄧小平は「理論」として名前が登場するに過ぎない。また、2 期 10 年とされていた国家主席の任期は撤廃されており、2012 年に権力を完全掌握した習近平が 2023 年以降も国家主席の地位にとどまることが可能となっている。党総書記、中央軍事委員会主席は明文化された任期の規定はないため、党、国家、軍のトップ、つまり中国の最高権力者として習近平が君臨し続ける体制が既に整っているのである。

習近平の「特別扱い」は、2021 年 7 月に実施された中国共産党の創立 100 周年記念の行事に際しても確認された。6 月 28 日夜、北京五輪のメイン会場として使用された国家体育场（通称「鳥の巣」）において歌、踊り、芝居等を交えた大規模なイベントが実施され、習近平ら最高指導部が観覧した。そこで行われた演劇では、党の歴史が以下の 4 つに区分された。

- ① 1921 年～：中国共産党が誕生し、国民政府との内戦、抗日戦などを経て全土を制圧していく時代
- ② 1949 年～：建国式典が行われ、朝鮮戦争などを経て社会主義国家を建設していく時代
- ③ 1978 年～：改革開放が始まり、北京五輪、上海万博などを経て経済的發展を遂げる時代
- ④ 2012 年～：習近平を核心とした指導により党・国家が歴史的変革を迎え、強国へと変貌する時代

つまり、鄧小平、江沢民、胡錦濤は③でまとめられ、毛沢東と習近平のみが個別に扱われているのである。この時代区分は、党創立 100 周年に合わせて整理されてきたものであり、同月に開館された中国共産党歴史展覽館における「『初心を忘れず使命を銘記する』中国共産党歴史展覽」での時代区分も同様であった。

これらから、習近平は既に鄧小平を引き離し、毛沢東に並ぼうとしているかのようにも感じられる。

### 歴代指導者の『人民日報』における登場頻度

中国共産党一党独裁の体制において、『人民日報』は中国共産党の機関紙という性格上、為政者の意向を忠実に代弁する役割を担っていると言える。ここで、習近平の存在感を測るの一助として、歴代指導者との比較をするため、中国共産党の機関紙である『人民日報』のデータベースを分析する。なお、中国では党、国家、軍それぞれのトップの地位は、江沢民以降、基本的に 1 人が兼務しているが、就任の日は必ずしも一致しない。ここでは比較を容易にするために、各人の中央軍事委員会主席在任期間（毛沢東は起算日を建国の日に設定）で検証した。『人民日報』が各人の氏名に言及した記事の数をまとめたのが「表 1」である。過去の指導者の上段の欄は権力の座にあった期間、下段の欄は第一線を退いた以降を計算したものである。

表 1 『人民日報』が各指導者の氏名に言及した記事の数

	期 間	日数	記事数	1 日 平均
毛沢東	1949. 10. 1～1976. 9. 9	9, 841	50, 907	5. 2
	1976. 9. 10～2021. 6. 30	16, 365	32, 402	2. 0
華国鋒	1976. 10. 7～1981. 6. 29	1, 727	5, 204	3. 0
	1981. 6. 30～2021. 6. 30	14, 611	99	0. 0
鄧小平	1981. 6. 29～1989. 11. 9	3, 056	4, 556	1. 5
	1989. 11. 10～2021. 6. 30	11, 556	31, 330	2. 7
江沢民	1989. 11. 9～2004. 9. 19	5, 429	31, 076	5. 7
	2004. 9. 20～2021. 6. 30	6, 128	2, 594	0. 4
胡錦濤	2004. 9. 19～2012. 11. 15	2, 980	19, 443	6. 5
	2012. 11. 16～2021. 6. 30	4, 245	661	0. 2
習近平	2012. 11. 15～2021. 6. 30	3, 150	48, 988	15. 6

出所：『人民網』の「人民日報図文数拠庫」から得た数値（各人の氏名に言及した記事数）を基に執筆者作成

注 1：システム上、複数頁にわたる記事の中で 1 回でも言及されていればその頁数が数値として計上されている。例えば 3 頁にわたる長文の記事中、その語が 1 回しか言及されていなくても得られる数値は 3 であり、1 つの記事中 10 回言及されていても、その記事が 1 頁に収まっている場合、得られる数値は 1 である。本稿で用いる同データは以下も同様。

注 2：2021 年 6 月 30 日までで計算、小数第 2 位を四捨五入（以下同じ）

メディアの果たす役割とともに、『人民日報』の頁数も時代により変化しており単純に比較はできないながらも、「表 1」からは、毛沢東、鄧小平は、彼らが実権を握っていた当時から『人民日報』に大々的に登場していたわけではないことが判明した一方、習近平の露出度が際立っていることが明確になった。また、過去の指導者では、華国鋒、江沢民、胡錦濤は退任後の登場が少ない一方、毛沢東と鄧小平は言及され続けていることが明らかになった。

毛沢東と鄧小平の建国の父、改革開放の総設計師としての位置づけが、華国鋒、江沢民、胡錦濤と比べ抜きんでていることが分かる。

## 歴代指導者の『人民日報』における排他性

「表 2」は、各指導者の時代に、他の指導者をどれだけ登場させているか、逆の言い方をすれば他の指導者の露出が如何に抑えられているのかを確認するため、『人民日報』における他指導者の出現頻度について確認したものである。

表 2 各人の中央軍事委員会主席在任等期間中、『人民日報』がそれぞれの指導者の氏名に言及した記事数

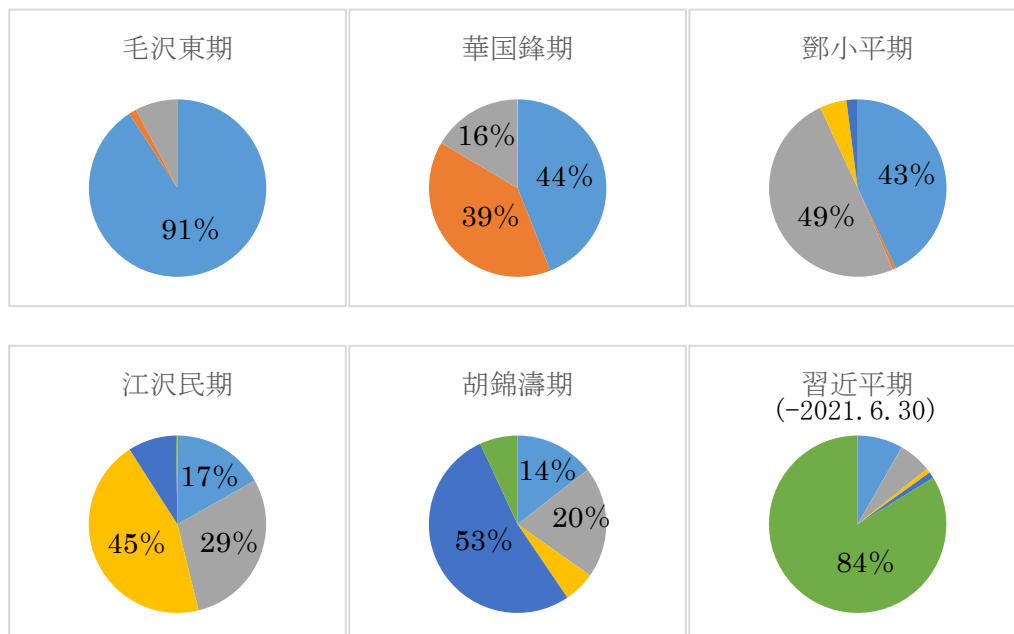
	毛沢東	華国鋒	鄧小平	江沢民	胡錦濤	習近平
毛沢東期	50,907	774	4,347	16	1	0
華国鋒期	5,801	5,204	2,166	11	0	0
鄧小平期	3,954	54	4,556	452	188	1
江沢民期	11,669	6	20,369	31,076	6,110	179
胡錦濤期	5,356	20	7,480	2,126	19,443	2,558
習近平期 (-2021. 6. 30)	4,837	19	3,494	471	670	48,988

出所：「表 1」に同じ。

注：表の見方は、『人民日報』が毛沢東期に華国鋒に言及した記事数は 774 件、毛沢東期に鄧小平に言及した記事数は 4,347 件の要領。

「表 2」から、習近平の時代においては他指導者の登場頻度が激減している事実が確認できた。下図は、その割合を視覚的に把握するためグラフ化したものである（10%を超える部分を付記、小数点以下を四捨五入）。

図 「表 2」をグラフ化したもの



凡例：■毛沢東 ■華国鋒 ■鄧小平 ■江沢民 ■胡錦濤 ■習近平

それぞれの時代において、『人民日報』では、過去の指導者、特に毛沢東と鄧小平に登場の機会が共有さ

れていたと言える。党の機関紙で、建国の父である毛沢東と改革開放で経済発展を率いた鄧小平を強調しているということから、「建国」「経済発展」に党の正統性を求めているものと見られる。しかし「図」からもわかる通り、実質的に前任者が存在しなかった毛沢東を除き、時の指導者自身が全体の大部分を占めているのは、習近平だけである。習近平期には、習近平自身の圧倒的な登場回数の前に、毛沢東と鄧小平ですら相対化されているのである。

## おわりに

今回の分析で、習近平の『人民日報』における扱いが、歴代指導者と比較して突出していることが明らかとなった。また、時代とともに『人民日報』は頁数が増加しているが、今日においては習近平の露出が際立つ一方、歴代指導者に言及する割合は逆に減少しており、排他的とさえ言える実態が浮かび上がった。

軍改革や腐敗撲滅等、他の指導者が遂げられなかったことを大胆に進めている習近平政権は、その喧伝にも余念がなく、毛沢東や鄧小平を凌ぐかのようなようでもある。そこには、大胆な政策を進めるための担保として、十分な権威を得ようとする政権の意図を見ることができる。この傾向のまま習近平の権威の強化が進められ、それが絶対化したとき、業績として「建国」「経済発展」を上回る衝撃を伴う、これまでにない過激な策が繰り出される可能性がある。また逆に権威失墜の可能性が生じた場合、起死回生の策を打つことも考えられよう。もともと中国は、世界最大規模のその軍事力とは釣り合わない、第一線の兵員の素養に弱点があると見られている<sup>1</sup>。実際の軍事衝突が、現場レベルで偶発的に引き起こされる可能性があることに常に注意しておかなければならないことに加え、それが国家として発動される恐れも考えられるということであり、いずれにしても、安全保障の観点も含めた観察・注意を要する状況である。

習近平が、「名実ともに」偉大な指導者に邁進していくのか、その道は持続可能なのかということも含めて、引き続き冷静に見ていく必要がある。

## プロフィール

profile

地域研究部

中国研究室

所員 3等陸佐 岩本 広志

専門分野：中国の軍事動向、中国の軍民融合

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>1</sup> 詳しくは拙稿「中国が目指す「世界一流の軍隊」が具備すべき条件について」『NIDS コメンタリー』第 150 号(2020 年 12 月 22 日)<<http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary150.pdf>>参照。